

令和元年6月2日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02141

研究課題名(和文) 科学と宗教 日本哲学の観点から

研究課題名(英文) Science and religion: from a viewpoint of Japanese philosophy

研究代表者

村田 純一 (Murata, Junichi)

立正大学・文学部・教授

研究者番号：40134407

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：最近の認知科学の宗教研究の成果と、西田幾多郎や田辺元による宗教論を手掛かりに、既成の科学と宗教を前提にして両者の関係を考えるのではなく、それらが成立してくる基盤をなす日常生活世界の次元にさかのぼって考える試みの意義を確認した。そして、このような試みから、現代のように科学技術の進展した生活世界においても、たとえば、新たな仕方で生じる死者とのかかわり、といった仕方で宗教性が成立しうる可能性を見出すことができることを示唆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの伝統的な科学と宗教をめぐる議論では、近代科学の成立とキリスト教との対立のように、既成の科学と宗教を前提にした議論がおもになされてきた。それに対して、本研究では、日常生活世界へさかのぼって問題を考え直すという新たな視点を提示することができた。それによって、西田や田辺の宗教理解への新たな解釈の可能性を示すとともに、現代においても、さまざまな場面で宗教性を見出す可能性があることを示唆し、新たな研究への方向づけを提示することができた。こうした視点の下で、様々な分野の研究者を招いての講演会を公開で行い、研究の社会的還元を試みた。

研究成果の概要(英文)：When it comes to the relationship between science and religion in the traditional research of science and religion studies, it is usual in the discussions in this research field that both sciences and religions are considered to be already established and have a definite content. In contrast, in the recent cognitive approach to religions and in the modern Japanese philosophy of religion discussed by Nishida and Tanabe, religions are thematized focusing on their roles and meanings in the everyday life-world, which is considered to be a basis of established sciences and religions. Considering the result of these cognitive research and on the basis of our interpretation of the philosophical views about religion in Nishida and Tanabe, we indicated that some sort of religiosity could be found even in the contemporary life-world, in which science and technology are extremely developed.

研究分野：哲学

キーワード：科学と宗教 日本哲学 認知科学 西田幾多郎 田辺元

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 科学と宗教：科学と宗教をめぐる議論は、この間、新たな仕方で多様な展開を見せてきた。

「科学と宗教」といえば、これまでおもに欧米で、近代科学の成立発展とキリスト教との間の関係をめぐる問題が論じられてきており、すでに「科学と宗教」というテーマはひとつの学問分野を示すまでになっている。この分野では、科学史、宗教史などの歴史研究、科学哲学や宗教哲学などの哲学研究を基礎にして、科学と宗教の関係を対立的に考えるのか、それとも、補完的な関係と考えるのか、などをめぐってさまざまな見解が提出され議論が積み重なってきた。

それに対して最近では、こうした伝統的な科学と宗教とを対比する見方には収まらない議論の展開がみられるようになってきている。

ひとつは、宗教を科学の対象とする見方である。20世紀の後半から盛んになった認知科学の発展とそれに伴う心の哲学の興隆に基づいて、宗教を認知科学の対象として理解することによって、宗教をどのような心の働きを基に成立してきたのかを解明しようとする試みが盛んになってきた。心の進化の過程のなかに宗教を位置づけるものから、瞑想や悟り体験を脳科学的研究の対象にする試みまで多様である。こうした試みは広い意味で自然主義に属する見方といえるが、しかし必ずしも宗教の意味や役割を自然現象に還元しようとするものばかりではなく、宗教に新たな意味を見出そうとするものも登場している。宗教に関する「柔らかい自然主義」といってよいような試みである。

さらには、科学の展開に内在的な仕方で、宗教的含意をもった問いの登場が問題となる場合もある。典型例は、現代宇宙論で話題にされる「ファインチューニング」や「人間原理」をめぐる議論である。宇宙の長い進化の歴史のなかで、人間のような意識をもつ存在が生まれる可能性は確率的にみてほとんど無に等しいにもかかわらず、それが実現していることをどのように理解したらよいのか。こうした疑問に答えるために提出される「人間原理」は、伝統的な目的論的説明と似たような構造をもっており、宗教的含意をもっているようにみえる場合がある。

どちらの場合も、科学技術のもたらす世界観と宗教を対立させるのではなく、むしろ科学技術の発展との関係のなかで宗教的なものを位置づける試みということができる。

こうした学問的な議論に加えて近年では、より広く、公共圏における世俗化と宗教との関係をめぐる問題が、社会的、政治的に大きな問題となってきた。こうした議論のなかでは、チャールズ・テイラーのように、必ずしも宗教的な要素を排除しない世俗化概念を提起する論者による議論や、ハーバーマスのように近代啓蒙を重視してきた論者からも宗教に一定の役割を認める必要性を訴える議論が生まれている。これらの議論からは、世俗化された日常生活世界を超越するのではなく、むしろ日常性のなかに内在するような仕方で実現する宗教のあり方が示唆されていると考えることができる。

(2) 日本哲学の遺産：「科学と宗教」をめぐる議論の多くは、欧米の思想的、文化的、社会的背景のもとでなされてきたものであり、日本の文脈に直接関係するものは必ずしも多くはない。しかし日本には、西田幾多郎をはじめとする京都学派の哲学のなかで、科学と宗教をめぐる議論が蓄積されてきた歴史がある。西田哲学といえば、禅仏教や東洋思想との関係が話題になるが、西田の哲学のなかには、より広い意味での宗教的なものをとらえる視点を見出すことができるように思われる。とりわけ後期の西田では、一方では科学や技術が重要なテーマとなると同時に、他方では、科学や技術を含めた歴史的世界の基礎に宗教を位置づける見方も提示されている。はたしてそのような意味での宗教を通常理解されている意味での宗教と解釈してよいのかどうか問題が残るが、いずれにしても、ここには、宗教に関する独特の理解の仕方が示されており、このような見方のなかから、現代における宗教の意味を理解する手がかりを取り出すことができるのではないかと期待される。以上のような仕方で、現代における科学と宗教の問題をできるだけ幅広く検討することが本研究の課題である。

## 2. 研究の目的

科学技術の発達した現代世界のなかで宗教はどのような意味と位置をもっているのだろうか。あるいはそもそももちうるのか。この問いが本研究の中心課題である。21世紀には、科学技術の発展によって啓蒙と世俗化が進展し、宗教の役割はこれまで以上に減少するだろう、という予想に反して、世界ではイスラム原理主義をはじめさまざまな宗教に関連した出来事が注目を集めている。こうした現状を踏まえて、本研究では、科学と宗教の関係を可能な限り広い視野からとらえ返すことを試みる。そのさいに、日本哲学、とりわけ西田幾多郎を中心とした京都学派で蓄積された遺産を改めて振り返り、日本という文脈を意識しながら、同時に異なった文脈に属する外国の研究者との対話を通して、科学と宗教をめぐる議論に新たな視野を開くことを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は、代表者のほか、3人の研究分担者の共同研究として行ったものである。研究者4人の担当を、大きく二つに分け、科学と宗教と題される問題領域をおもに西欧の文脈を中心に

検討するグループと日本の文脈に焦点を合わせて検討するグループに分けて研究を進めたうえで、相互に成果を検討しあうことを行った。同時に、年3回の研究会では、外部からの研究者を招いたうえでの講演会を公開で開いて、研究成果の社会的還元にも努めた。また、国際的文脈でこの問題を考察するために海外の研究者との交流も進めた。

具体的には、上智大学の田中裕氏(ホワイトヘッド研究者)、龍谷大学の伊藤邦武氏(仏教における科学と宗教)、東京大学の高橋宏知氏(脳科学からみた科学と宗教)、立教大学のChristopher Kavanagh氏(文化人類学の視点からの科学と宗教)、アメリカの西田研究の代表者のJohn Krummel氏(西田と西欧の宗教論を中心にした連続講演会)、台湾大学のWoi-Hung YEN氏(初期中国仏教と仏教倫理学)などの方々に話題を提供していただき、議論を進めることができた。

#### 4. 研究成果

##### (1) 宗教の多次元性

最近の宗教についての認知科学的研究の成果としてあげられるのは、宗教をひとつの本質によって規定するのではない多元的な見方である。すなわち、宗教は、人間の持つ多様な認知機能が、その時々文脈に応じて「宗教的」と呼びうるような経験を生み出したり、社会的儀式を生み出したりすることから生じてくるとみなされる。こうした見方に従うと、宗教と呼ばれる現象を一義的に定義できるものと考えすることはできず、多面的で、多様なあり方をする現象と考えることが必要になってくる。

科学と宗教という仕方でも問題を定式化すると、異なった本質を備えた二つの現象が話題になっているように理解されがちである。とりわけ現代の代表的な宗教をモデルに考えると、体系化された教義に基づいた専門家集団を中心として成り立つ社会的組織とみなされるために、科学のようにある程度明確化された規範と理論に基づき、やはり専門家集団を中心として成り立つ社会組織と対抗的・対立的に考えられやすい。しかし、宗教は歴史によって、あるいは、地域によって、じつにさまざまな形態をとりうるものであり、決して一義的に定義できるようなものではない。

宗教については、不可解な現象を説明するために創出されたという主知主義の見方や、人びとに安らぎを与えるという情動の見方、あるいは、社会的結合を可能にするために必要とされた組織であるといった見方、そしてさらに聖なる価値を中心とした人間経験のあり方を基本とみなす見方など、宗教をめぐるさまざまな定義の試みがなされてきた。そうした見方はどれも、まったく間違っているわけではないが、それらひとつだけが「本質」とみなされる必要はなく、そうしたさまざまな要因が、さまざまに組み合わせられて生じる現象だと考えるほうが自然なのである。

以上のように考えると、宗教というものをあいまい化してしまうように思われるかもしれないが、むしろ、このような広い観点から宗教を考えることによって、科学技術が進展し近代化と世俗化が進むことが直ちに脱宗教化をもたらすというような考え方から脱して、あらためて、近代化された世界のなかでの宗教のあり方へと目を向けることができるようになると思われる。

##### (2) 日常性と宗教

上で提示したような宗教に対する見方は、最近の宗教に対する認知科学や文化人類学の分野での研究成果に基づいたものであると同時に、西田哲学のなかでの宗教理解からヒントを得たものでもある。

西田は、晩年になって科学と宗教に関する論文を集中的に書き続けた。そして、科学と宗教は相反するどころか、むしろ、科学は宗教によって基礎付けられると主張している。というのも、宗教とは、自己の独断を捨てて、物そのものとなって考え行くことだからだ、といわれる。そして本来の宗教とは、科学や既成の宗教などなんらかの立場を取るものとは違って、あらゆる立場を超えた「立場の立場」であるとみなされる。したがって、しばしば宗教の本質とみなされる教義内容や、安心の供給という役割などは本来の宗教のあり方を示すものではないと主張される。むしろ、宗教心はどんな人間にも備わっているものであり、人間であるということはすなわち宗教的存在であるということに他ならないとみなされる。そして、人間であるということは、西田によれば、つねに「作られたものから作るものへ」と矛盾的自己同一のあり方を示しながら変転していく創造的過程のなかで自己というあり方を実現しているとみなされ、それゆえ、そうした矛盾したあり方のなかで日常生活を実現することを自覚することがすでに根本的に宗教的なあり方を示すことになると考えられる。結局、西田によれば、矛盾的自己同一というあり方をしている歴史的世界の自覚として自己を理解することがすでに宗教的であり、また、宗教的であらざるをえないということになるのである。既成の宗教は、こうした人間存在のあり方を抽象化したり理想化したりしてひとつの側面のみを表現にもたらしたものであり、それは、科学がひとつの理論体系という仕方でもこの世界を表現にもたらしたものであることと対極をなしながら、対になっているのである。

もしこのように考えることができるなら、人類はその歴史の最初から、なんらかの仕方でも宗教的であり続けてきたのであり、また、そうあり続けざるをえないのである。たとえ、科学技術が発展して、世界の合理化が進んだとしても、歴史的世界が矛盾をはらみながら創造性をもたらざるをえない限りなんらかの仕方でも宗教的なあり方を実現することになるだろう。現代にお

いても「神なきところに神を見る」あり方がどのように実現しており、どのように可能なのかを探ることが必要なのである。

### (3) 科学技術時代における「死の哲学」

以上のような西田の枠組みとはずいぶん違った仕方ではあるが、晩年の田辺元の「死の哲学」といわれる考えのなかにも、科学技術の発達した現代の日常生活のなかで実現している人間存在の基本的あり方に即して、宗教のあり方をとらえていると解釈可能な見方を見出すことができるように思われる。

田辺によると、現代では人類の生存を謳歌するように科学技術が進展してきたが、その結果、核兵器の蓄積、地球環境の破壊と気象変動などによって、むしろ人類の生存自体が危機に陥れられようとしている。こうしたあり方を田辺は、「生の哲学」が行き詰まり、自己矛盾に陥っている状態ととらえ、この状態を突破するためには、忘却されている生の裏面ともいえる死の側面に光を当てることが必要になると考える。つまり、「生の哲学」から「死の哲学」への転換が求められているというのである。ただしここでいう死の哲学とは、生を否定して死へと進むということではなく、むしろ生のなかで生を支える働きをする死のあり方に光を当てるとのことである。田辺はこうした忘却されてきた死の次元へ心向けるところを死者との「実存共同」と呼んでいる。最近では、東日本大震災や原発事故などとの関係もあり、田辺のこの死者論は改めてさまざまなしかたで話題にされるようになってきた。

先に示した西田についての解釈が認められるなら、田辺の「死の哲学」は、西田が矛盾的自己存在と呼んでいるあり方を生と死との矛盾的な同一性として捉えなおし、さらには、具体的な死者とのあいだでさえ、生かし生かされるというあり方が可能となっていることを示したものと解釈することも不可能ではないと思われる。そしてここで視野を広げて、宗教の発生期のひとつの状態として、先祖が日常生活の周囲にいつも居合わせていたような生活のあり方が想定されうることを考慮すると、田辺の取り上げる死者との共同は、むしろ、宗教現象のもっとも原初的な形態での死者との共存ともつながっていると（ひとつの仮説として）考えることもできるように思われる。つまり、もっとも基本的な宗教的なもののあり方が、現代においてふたたび原初の状態とは違った仕方ではあれ、再生していると解釈しうることになる。もしこのように考えることができるとするなら、田辺の「死(者)の哲学」は、科学技術の進展が極限にまで至ろうとしている現代における宗教のあり方を考えるうえで大きなヒントを与えてくれるものと思われる。

以上を要約していえば、科学と宗教をめぐる伝統的な議論がもっぱら既成の科学と宗教を題材としていたのに対して、本研究では、最近の認知科学の成果と西田や田辺の宗教論の解釈を通して、既成の科学や宗教の基礎となっている日常的な生活世界にまでさかのぼって宗教性のあり方を解明し、それによって、現代世界における宗教の意味を再考しようとしたということになる。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 4 件)

- 板橋勇仁、科学の共同性と宗教 C.S.パースを手掛かりにして、プロセス思想、査読無、18巻、2018、pp.39-49  
柳澤田実、純粋な贈与はどこにあるのか、なぜあるのか：Bataille から Baumard へ、現代思想、査読無、18巻09号、2018、pp.182-193  
田口茂、媒介の哲学 第五章「死の哲学」とリアリティの核心、思想、査読無、1123巻、2017、pp.96-120  
村田純一、作られたものから作るものへ 西田幾多郎における技術・科学・宗教、日本の哲学、査読無、18巻、2016、pp.88-105

### 〔学会発表〕(計 4 件)

- TAGUCHI, Shigeru, Self as Mediation: Husserl and Tanabe on basic states of self, 道元の思想圏：分析アジア哲学的アプローチ、2018  
柳澤田実、道徳性の進化と宗教に関する経験的研究の意義を考える、土井道子記念京都哲学基金シンポジウム、招待講演、2018  
村田純一、知覚経験の multimodality：感覚とはなにか、カント・アーベント、招待講演、2017  
ITABASHI, Yujin, Does Nothing Overcome Nihilism of Life?: Schopenhauer and Nishida, 復旦大学哲学科コロキウム、招待講演、2017

### 〔図書〕(計 2 件)

- 村田純一、味わいの現象学、ぷねうま舎、2019、333  
Altobrando, A., Nikawa, T., Stone, R., TAGUCHI, Shigeru, The Realization of the Self, 担当箇所 Non-contextual Self, Palgrave Macmillan, 2018, 292(31-46)

〔産業財産権〕  
出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：板橋勇仁  
ローマ字氏名：(ITABASHI, Yujin)  
所属研究機関名：立正大学  
部局名：文学部  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：30350341

研究分担者氏名：田口茂  
ローマ字氏名：(TAGUCHI, Shigeru)  
所属研究機関名：北海道大学  
部局名：大学院文学研究科  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：50287950

研究分担者氏名：柳澤田実  
ローマ字氏名：(YANAGISAWA, Tami)  
所属研究機関名：関西学院  
部局名：神学部  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：20407620

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。